

《 書 評 》

清水大介著『波即海——イエーガーなみそくうみ虚雲こうん しんびしそ う ぜんの神秘思想と禅』

ノンブル社、2007年8月29日刊、B6判、214頁

寺尾 寿芳

(南山宗教文化研究所 非常勤研究員)

キリスト教と仏教との対話は、研究者による教義、教説、神学等の比較考察にとどまらず、いまや第一線の宗教者たちによる深い相互体験の域に達している。ことに欧米系カトリックと日本の禅仏教との交流に目を留めれば、日本で宣教活動を行った西洋出身のカトリック司祭が西洋社会に禅を紹介するとともに、日本人司祭の中からも禅仏教に強い影響を受けた人物が数多く生まれている。他方 1979年以降実施されてきた東西霊性交流は多大な成果を挙げ、禅仏教側でも開かれたキリスト教会の動向に注目する態度が熟してきたと言えよう。いまやこの二つの宗教の対話を実践する人々のあいだでは、キリスト教側が西洋人、禅仏教側が日本人（アジア人）によって担われるという通念的図式がまったく当てはまらないまでに、相互交流は事実として結実している。

しかし、宗教間対話に積極的であったヨハネ・パウロ二世が死去し、かつての教皇庁教理省長官で、ヨーロッパ的伝統への回帰傾向が著しいラッツィンガー枢機卿がベネディクト十六世として教皇に就任後、既成の東西霊性交流は歩みを止め、また欧米社会における仏教もかつての禅仏教が独占的な指導力を発揮していた時代は終わり、チベット仏教など多様で新しい流れが併存するようになっていく。そうしたなか、一見して宗教界の表舞台から退きつつあるカトリックと禅仏教との邂逅が果たす同時代的成果を確認しておくことは、過去の歩みを今後につなげていくうえでもきわめて重要な意味をもつものと思われる。

ヨーロッパにおける「禅キリスト教」の形成過程を、参禅者が抱く宗教観や宗教哲学的な知見への洞察から描写した最新の文献としては、佐藤研による『禅キリスト教の誕生』（岩波書店、2007年）があるが、同氏自らが「ただ問題提起のために出版される本」（同書 233頁）だというように、この書は聖書学者が西欧におけるキリスト教離れという事実を弛緩した教会関係者や神学者に対して突き付ける覚醒喚起の書物である。他方、本評で取り上げる清水大介著『波即海』は、キリスト教と仏教の双方に精通した篤学の哲学・宗教哲学・倫理学研究者の手になる、一禅キリスト教実践者の思想と活動を扱ったバランスのとれた入門書である。佐藤の著書がときに厳しい語り口を伴う問題提起を示し、また有力出版社か

ら刊行されたこともあり広く学界の話題の的となったのに対して、『波即海』はそのすぐれた内容にもかかわらず、日本ではほとんど無名に近いカトリック司祭を取り扱っていることや、名利を追わない著者の謙虚な姿勢等から、さほど知られていないことは極めて残念であり、ここに内容紹介と若干の私見を呈することで多くの研究者がこの示唆深い著作にふれ、研究活動の糧にさせていただきたいと念じるところである。

本書はヴィリギス・イエーガー (Willigis Jäger、ドイツ人、1925 年生まれ、ベネディクト会修道司祭) の思想について主著『波即海』(Die Welle ist das Meer, 2000 年) を中心にその特徴を明らかにしたものであり、全 16 章構成である(著者には本誌第 5 号に掲載された「キリスト教と禅の相克と調和——ヴィリギス・イエーガーの場合」があるが、同稿は本書の第 1 章と第 3 章に反映されている)。各章は短く簡潔な記述であり、かつ充実した註記を備えているため、読者は明確に大筋を把握できるとともに、詳細な情報を得ることもできる。参考までに章題を挙げておこう。1. イェーガー事件(二〇〇二年)、2. 観想講習会の禅的修練、3. キリスト教神秘主義と禅の同質性の経験、4. 波即海—現実の事物への神の内在の強調、5. 神と無相の自己、6. キリスト教神秘主義と禅の根本経験の構造的相似、7. 神の人格性、8. 無と神、9. 神人、10. 人格神信仰の必然性、11. 日常性への復帰、12. 身体の重視、13. キリスト教義化論と我執の放下、14. 最後の審判の教義に対する批判、15. 現代科学者の世界観と神秘主義、16. 超宗教・超宗派的靈性の立場。これらに加えて、イエーガーの著作リスト、略年譜、あとがき、そして充実した索引が掲載されている。

第 1 章では、イエーガーが 6 年間にわたる滞日期間を含め 12 年間にわたり禅の修行を積み、その後ドイツ各地で開催した講習会が多くの参加者を得たことを紹介し、つづいて、そのような人気を危険視したバチカンの教理省によって 2001 年にイエーガーに対して発令され翌年公開された活動禁止令に発する一連の顛末を描写している。そこでは、現代科学の宇宙観と現代人の世界観を受容するよう望むイエーガーに対して修道会上長やドイツ社会が同情的であることも述べられている。

著者が指摘するように、現在のバチカンはいわゆる他宗教との交流に厳しく、むしろカトリックの伝統を過剰なまでに擁護していることが否めない。1998 年にはアジア特別シノドス(シノドスとは「世界代表司教会議」と通常翻訳される)では日本司教団がアジアの独自性を容認するよう強くバチカンに要請したものの、その要望は教皇の使徒的勸告『アジアにおける教会』(Ecclesia in Asia, 1999 年)にて事実上慎重に拒否されている。また主にインドで司牧活動を経験したイエズス会士数名が同時期に活動停止処分に遭っていることを鑑みても、イエーガーをめぐる著者の状況説明はこうした事情とも合致したもので、妥当なものである。ただ、著者はこのような強硬な抑制策を推進する勢力を一般報道機関に倣って「超保守派」としているが、この語彙は第二バチカン公会議自体を否定する復古主義者を想起させるため、著者自身も理解しているように「厳格な保守派」(21 頁の註 11) とするか「教

条主義的保守派」と呼ぶべきであろう。

つづいて、かくもバチカンから圧迫を受けているにもかかわらず、従来教会から離れていた人々がイエーガーの講習会に参加することで再び教会に立ち戻っていることが指摘される。イエーガーは神学者や思想家ではなく、また禅堂の厳格な師家でもない。むしろ既存の信仰形態に満足できない人々が神と自己を再発見できるように助ける「付き添い人」であり、実際講習会で行われているのは一種の「心理セラピー」だと語っている。こうした経験をなにより重視する態度が第2、3章で語られる（さらに第11章では「神は……生きられねばならない」といわれている）。ここで著者はその技法の核心を意識の集中と空化に見て取っている。註においてこの構造は、東方教会の「イエスの祈り」、『不可知の雲』、十字架のヨハネ、そしてプラトンの思想に通底するものとして詳述されている。第4章では、イエーガーが至高と考える「神の内在性」が西田幾多郎や滝沢克己の発想を借りるかたちで巧みに説明されている。他方、「神が万物に内在する」と「神の内に万物がある」ことを宇宙すなわち交響楽として一つのことである語るイエーガーの主張は、禅よりもむしろ密教的な印象を与える（「入我我入」等）が、この点に関しては言及されていない。

本書全体を通じてイエーガーの柔軟なキリスト教理解の根拠は「ケノーシス」（無化）におかれ、それは禅における「真如も自性を守らず」に相応するとされる。註記において著者は、この事態をキリスト教の伝統においてはイエーガーも述べるようにエックハルトに、仏教の流れでは著者独自の見解として唯識において観察できるとし、簡潔にその内実を解き明かしている。もちろん神や真如の自発性としてのケノーシスや無自性にとどまらず、修行者はそれに応えるべく大胆な「殺仏殺祖」を旨とするのだが、イエーガーもこの言葉をイエスに適用できるか問われた際に「できます」と答えているが（第8章）、カトリック司祭という立場を考慮すれば、覚悟のほどが十分に推察できるエピソードである。これは遠藤周作の『沈黙』における「踏むがよい」云々という、非正統的な内容ではあれ、いまだ人格的神の優越性が保たれている一節でさえも教会から批判されたような時代に生きていたならば、決して口にできない言葉であろう。さらにイエーガーは贖罪思想が原罪の過剰な強調により、人間が神を内在させる「神人」である事実を抑圧してしまうとして批判し、むしろイエスの神秘経験をこそ重視すべきだと主張する（第9・10章）。それは「神人」であるわれわれに対する神秘経験へのいざないでもある。しかもそこではイエスの唯一無比は容認されず、イエスは経験を体験する際の「範型」にとどまるとされている。

ことにこの「範型」問題は、滝沢克己の「インマヌエルの原事実」（そのうちの「神人の第二義の接触」あるいは「インマヌエルⅡ」）という発想に関連する、戦後キリスト教思想界の一大トピックに至りうるだろう。滝沢のこの思想はドイツ留学時代のカール・バルトとの対話に発しており、また滝沢神学がドイツに紹介されてすでに久しい（滝沢は晩年ハイデルベルク大学から名誉神学博士号を得ており、また同大の宣教神学者テオ・ズンダーマイヤー教授は滝沢神学の強力な支持者である）。日本での修行経験もあり、ドイツで孤軍奮闘するイエーガ

一が滝沢の思想に触れることはなかったのだろうか。

さて宗教の将来像を考察するに当たっては、科学との関係を考慮することが欠かせない。イエーガーは形而上学再発見の時代が到来すると予想し、その担い手を哲学研究者や神学者ではなく、理論物理学者や分子生物学者に期待している。なぜなら科学者は現実の問題を考え抜く過程で分別知性の限界を悟るからだとされる。他方、キリスト教神学ははまだ農業的身分社会に発するメタファーに彩られた中世的世界観に固執するなど、変革への勇気を欠く存在とみなされている（第15章）。自然科学の知見から神学が乖離しすぎていることは評者も日ごろ痛感しており、よってイエーガー、そしてその思想の紹介者である著者と意見を同じくしている。ここから科学者たちがどの程度イエーガーをはじめとする禅キリスト教に関心を抱き、実践活動に参加しているのかが関心の対象に浮上してこよう。もちろんこうした方面は入門書としての本書が本来見定めた目的を超える課題であろう。

最終章で、イエーガーの超宗教・超宗派的靈性に対する期待を紹介することで、イエーガーの営みがカトリックや禅といった枠組みを超えて、宗教に関心を持つすべての現代人への問いかけ、あるいはいざないとして、その存在意義をもつ点が明らかにされる。

全編を通じて本書は、イエーガー思想の概要を述べるとともに、長年蓄積されてきたキリスト教と仏教との対話に見出しうるエッセンスを凝縮したものとなっている。著者の過不足なき達意の文章は、いささかの論旨のぶれもなく、二つの偉大な宗教的靈性が出会った際に現れる最も高度な融合形態を描写しえている。本書から多くを学んだ一読者としてあらためて著者に感謝の意を表しておきたい。今後、キリスト教と仏教との実践的交流を語る際に、本書に触れないことはありえないであろう。まさに必読の書である。

ことに、禅と神秘主義との接点を、著者がイエーガーを通じて具体的に表現しえたことは重要である。周知のように、禅仏教の西洋世界への紹介者として著名な鈴木大拙は当初禅とキリスト教の共通点を注目したが、やがて両者の混同を恐れて相違性も強調するようになったと言われる。しかも、キリスト教神秘主義と禅仏教の共通性までも大拙が否定したものにもかかわらず、禅に親しいと思込んでいる多くの日本人宗教研究者や実践家は、大拙の真意からはずれ、両者を過剰に分離してしまっている観がある。しかし、エノミヤ（愛宮）・ラサールやハインリヒ・デュモリンの著作を参照するまでもなく、西洋のキリスト者にとって神秘主義はたんなる神観の探求にとどまらず、いわば己事究明の営みとしても重要なものであった。著者も言及するように、東洋人が大切に「自己」をクリスチャンは「神」概念に投影しているのであり（第5章）、その自己はまずは神秘的な経験においてこそ探求されてきたのであって、本書がその現代的事例を簡潔明瞭に紹介しえたことの功績は非常に大きい。

さて、入門書である本書に対して以下のような煩瑣な要望を表明することは妥当ではないと知りつつ、今後の一層の展開への期待を込めて、いくばくか非礼の類をお許しいただ

きたいと願う。

キリスト教の超対象的瞑想と禅はともに特殊宗教的イメージをいわば言挙げしない点で共通し、ときに等置できるものとされた。それは宗教間対話という文脈において意義深いことであったといえる。しかし、すでに触れたようにイエーガーの瞑想には密教に通じる面があり、また禅と密教は全一の宇宙を一種の変性意識状態で直観する点で共通しており、意外に近い関係にある。今後こうした方面からの考察が望まれよう。もっとも、著者は密教には触れないものの、イエーガーと同じくトランスパーソナル心理学を肯定的に理解しており、そこで密教的な要素を満たしているといえる。しかし否定性が前面に出る禅と肯定性が色濃い密教では相容れない面も多い。こうした点に関して入門編を超えた展開が今後期待されるところである。

また本書は、実に広範にわたって日本人思想家の営みとイエーガーの思想との共通点をほとんど余すところなく剔抉するにもかかわらず、きわめて重要な人物が一人まったく言及されていない。井筒俊彦のことである。おそらく謙虚にして自己の学道に厳しい著者は自家薬籠中にいまだ至らずと判断したその思想にあえて触れなかったのであろうが、否定のはたらきとしての無に続く再創造としての無の営みを井筒ほど巧みに論述してみせた思想家は珍しい。よって真空妙有に通じるイエーガーの思索と井筒哲学との対話・対決をぜひ見てみたいと思うのは自然な欲求であろう。

最後にイエーガーの著作は至急邦訳されねばならないことを申し上げておきたい。ドイツ語原著では多くの読者を獲得することは困難であろうし、数冊の英訳はすでに存在するもののその翻訳に関する是非は判じがたい。幸いにも著者はイエーガーの思想に精通しており、また長年のウィーン留学で修得した特筆すべきドイツ語運用能力の持ち主である。

『波即海』の原著（上記の *Die Welle ist das Meer*, 2000年）をはじめとする著作類の翻訳刊行にぜひ取り組んでいただきたいとこの場を借りてお願いしておきたい。

なお、著者がイエーガーに言及した論考としては、本書とは別に論稿「愛宮ラサールにおける坐禅とキリスト教の瞑想」（『花園大学国際禅学研究所論叢』第3号、2008年）があり、あわせて読まれるべきである。